

ムーティが6度目の登場で、コロナ下に新しい年を祈る

若宮 由美 (op.257)

リッカルド・ムーティが1993年に初めてニューイヤー・コンサートの指揮者を務めてから今度で6回目の登場。黒髪のアートで若者の印象があったムーティが79歳になり、老齢の顔で2018年から2年でニューイヤーに戻ってきます。コロナが全世界を襲い、深刻な世の中の雰囲気を吹き飛ばすように、新年の願いを込めて演奏します。

フランツ・フォン・スッペ：〈ファティニッツァ行進曲〉

Franz von Suppé: *Fattnitzza-Marsch*

スッペ(1819-95)はダルマチア地方スプリトの生まれ。オペレッタ《ファティニッツァ》は1876年1月5日にウィーンのカール劇場で初演。クリミア戦争を舞台にした作品。ファティニッツァに姿を変えたウラジミールの話。同行進曲は第2幕と第3幕の間に出てきます。

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈音波〉 op.148

Johann Strauss (Sohn): *Schallwellen, Walzer, op.148*

1854年、ヨハン2世(1825-99)はウィーン大学の技術学生のために同曲を作曲し、2月7日にゾフィーエンザールの技術家舞踏会で初演。この曲を聴けば、ヨハン1世(1804-49)やJ.ランナー(1801-43)から継承したワルツの形式に、当時の交響曲やオペラの刺激を入れようとしたことがわかります。E.ハンスリックは「ワルツ・レクイエム」と嘆いています。

ヨハン・シュトラウス2世：〈ニコ殿下のポルカ〉 op.228

Johann Strauss (Sohn): *Nico-Polka, op.228*

このポルカは、ヨハン2世が1859年夏にサンクトペテルブルク近郊パヴロフスクを訪れていた時の作品。公の初演は7月14日(ロシア暦7月2日)にヴォクソル(鉄道の施設)での「シュトラウスの慈善演奏会」。それ以前に私的な場で演奏された可能性があります。それというのも、献呈者が12歳のN.ダディアーニ王子(1847-1903)であるからです。若いながら王子は南コーカサスの「ミングレリア」(「1000の泉の地」とも呼ばれる地)という国の支配者でした。ウィーン初演は1860年2月13日のゾフィーエンバートでの大舞踏会。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈憂いもなく〉 op.271

Josef Strauss: *Ohne Sorgen, Polka schnell, op.271*

ヨーゼフ(1827-70)は1869年夏に兄ヨハン2世とそろってパヴロフスクに赴きました。ヨーゼフは体調が優れず、心配の種は尽きませんでした。希望をこめて楽天的な題名の曲を作曲し、9月22日にパヴロフスクのヴォクソルで同曲を初演しました。

カール・ツェラー：ワルツ〈坑夫ランプ〉

Carl Zeller: *Grubenlichter, Walzer*

ツェラー(1843-1922)はウィーンで生まれ。1863年11月20日にディアナザールでデビューし、ダンス音楽の分野で名を成しますが、オペレッタの分野でも活躍しました。同曲はオペレッタ《坑夫長》のモチーフを用いて1894年に作られました。南ドイツの鉱山労働者

を愉快に描いた同オペレッタは、1894年1月5日にアン・デア・ウィーン劇場で初演。有名な役者のA.ジラルディ(1850-1918)が主役である坑夫長のマルティンを演じました。

カール・ミレッカー：ギャロップ 〈贅沢三昧〉

Karl Millöcker: *In Saus und Braus, Galopp*

ミレッカー(1842-99)は、学生のうちからスッペの下でヨーゼフシュタット劇場の仕事に参加し、それからずっと劇場関係の仕事続け、オペレッタを始めとする100作を超える劇場作品を手がけました。この曲は、オペレッタ《キスのリハーサル》から動機を引用しています。オペレッタは1894年12月22日、アン・デア・ウィーン劇場で初演されました。

フランツ・フォン・スッペ：歌付きの喜劇《詩人と農夫》序曲

Franz von Suppé: *Ouverture zu "Dichter und Bauer"*

スッペは1846年8月24日にウィーンのアン・デア・ウィーン劇場でこの喜劇を初演。初期の頃にはリハーサルの指揮者として忙しく、この作品の序曲にあてる時間はあまりありませんでした。3幕仕立ての劇は上バイエルンを舞台。庭師ヘルミーネと恋人である詩人レーマーのドタバタ劇です。同序曲は20世紀半ばまで人気を保ち、パウル・ヒンデミット(1895-1963)は1923年に彼の2番目の作品〈ミニマックス〉第2楽章に同序曲を使用。

カール・コムザーク 2世：ワルツ 〈バーデン娘〉 op.257

Karl[Karel] Komzák junior: *Bad'ner Mad'ln, Walzer, op.257*

プラハ生まれのカール[カレル]・コムザーク(1850-1905)は、リンツの軍楽隊に入隊し「ボヘミアの楽士」として知られるようになりました。オーストリア帝国の軍楽隊を巡り、1882年にウィーンの第84歩兵連隊の軍楽隊長に就任。軍楽にもたらした大きな貢献は弦楽器の導入です。この楽曲は1898年夏にバーデンのクアパルクで初演されました。序奏は行進曲で始まり、途中でシュランメル風の3拍子になり、ワルツへとつながってゆきます。

ヨーゼフ・シュトラウス：〈マルゲリータ・ポルカ〉 op.244

Josef Strauss: *Margherita-Polka, op.244*

ヨーゼフは、1868年4月22日に行われたイタリアのウンベルト王子(1844-1900)とジェノヴァ公の娘マルゲリータ(1841-1926)の結婚式のために同曲を作曲し、イタリアへ送りました。この曲のため努力するも実現せず、仕方なく1868年6月13日に造園協会で開かれた第1回プロムナード・コンサートを初演の場としました。

ヨハン・シュトラウス 1世：〈ヴェネツィア人のギャロップ〉 op.74

Johann Strauss (Vater): *Venetianer-Galopp, op.74*

ヨハン1世は1833年にはウィーンの帝室アウガルテンで「ヴェネツィアの夜」と名付けられた野外の祝祭を開き、成功を収めています。当時としては珍しく1834年に同じ祝祭を7月21日に開き、再度の大成功をもたらしました。20メートルに渡ってランプを吊るした「ランペレル・ヒルシュ」(本名カール・F. ヒルシュ)の尽力のおかげで、多勢も観客が集まりました。そこで演奏されたのが同曲です。この作品もヴェネツィアの書割のなかで演奏され、大喝采を浴びました。カスタネットの響きが軽快さを助長させます。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ワルツ〈春の声〉 op.410

Johann Strauss (Sohn): *Frühlingsstimmen*, Walzer, op.410

1883 年、アン・デア・ウィーン劇場で「皇帝夫妻による慈善公演」が開かれました。ウィーン宮廷歌劇場のソプラノ歌手ビアンカ・ビアンキ(1855-1947)は、この公演ために独唱ワルツをヨハン 2 世に依頼します。作曲途中の 2 月、ブタペストを訪れたシュトラウスは、あるパーティーでリストと再会し、互いにピアノを弾きあいました。その場で〈春の声〉の一部も奏され、2 人の交流が〈春の声〉の完成に決定的な影響を与えたといわれています。3 月 1 日の初演で大喝采を博しました。オーケストラ版は声楽版とは異なるオーケストレーションで書かれています。オーケストラ版は、1883 年 3 月 18 日に弟エドゥアルトが指揮する楽友協会での「日曜コンサート」で初演されています。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ポルカ・フランセーズ〈クラップフェンの森で〉 op.336

Johann Strauss (Sohn): *Im Krappfenwaldl*, Polka française, op.336

1869 年夏、ヨハン 2 世はパヴロフスクに滞在し、ヴォクソルでの演奏会の指揮をしました。自由時間には彼は庭園を散策し、このポルカの想を得ました。森を描写した音楽は〈パヴロフスクの森で〉と命名され、9 月 6 日(ロシア暦 8 月 25 日)の慈善演奏会で初演。ウィーンでは 1870 年 6 月 25 日に弟エドゥアルドがフォルクスガルテンでの演奏会で、今度は〈クラップフェンの森で〉という題名で演奏しています。ウィーン版の題名は、グリーンツィングからブドウ畑を抜けてカーレンベルクの丘に至る途中にあった実際のレストラン名で、最初の所有者フランツ・ヨーゼフ・クラップフェンの名に由来します。

ヨハン・シュトラウス 2 世：〈新メロディー・カドリーユ〉 op.254

Johann Strauss (Sohn): *Neue Melodien-Quadrille*, op.254

G.ヴェルディ(1813-1901)は 1843 年に《ナブッコ》でウィーンを訪れますが、アルプス以北で本当の評価を獲得するには何年も月日が必要でした。ヨハン 2 世は新作のオペラが上演されると、つとめてその中の曲をウィーンの聴衆に披露してみせました。カドリーユは 6 曲の短い曲を連ねたもの。出典(順不同)は、G.ドニゼッティ(1797-1848)の《ランメルモールのルチア》(1835)から No.5 エンリコの〈お前が私を裏切れば〉、《ベリザールオ》(1836)から No.3 ジュスティニャーノと合唱の出撃〈勝利の歌〉、《連隊の娘》(1840)から No.3 マリーの〈誰もが知っている〉と No.8 のマリー、トニオ、シュルピスの〈3 人が揃った〉、V.ベッリーニ(1801-35)の《夢遊病の女》(1831)からフィナーレ I のストレッタ〈結婚しない〉とエルヴィーノの〈これは違う、恩知らずの心だ〉、ヴェルディの《椿姫》(1835)から No.1 合唱〈招待の時間はとくに過ぎていますよ〉へのオーケストラ伴奏、No.10 ジェルモン〈プロヴァンスの海〉、《エルナーニ》(1844)から No.9 の合唱のギャロップ〈喜びましょう! 歓喜が皆にあふれますように〉、《リゴレット》(1851)から No.2 マントヴァ公爵のバッラータ〈あれかこれか〉、《イル・トロヴァトーレ》(1853)から No.4 イネスのカヴァティーナ〈この心言葉にいえね〉、No.7 の幕間音楽の器楽部分、No.20 のオーケストラのアレグロ・ヴィーヴォ。

ヨハン・シュトラウス 2 世：〈皇帝円舞曲〉 op.437

Johann Strauss (Sohn): *Kaiser-Walzer*, op.437

1889 年、ベルリンに「ケーニヒツバウ」という名前の演奏会場が完成し、10 月 19 日から

5日間の「こけら落とし演奏会」に、著名な音楽家たちが招待されました。ウィーンの「ワルツ王」であるヨハン2世もその1人。オペラ《騎士パースマーン》の制作にかかりきりで演奏活動から遠ざかっていた彼でしたが、この招待を受けて〈皇帝円舞曲〉を作曲しました。タイトルは「皇帝」が誰かを明示していません。ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世とも、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世とも考えられ、じつに巧妙です。10月21日に初演され、またたく間にヨーロッパ中で評判になりました。ウィーンでの演奏は11月24日。

ヨハン・シュトラウス2世：シュネル・ポルカ〈恋と踊りに夢中〉 op.393

Johann Strauss (Sohn): *Stürmisch in Lieb' und Tanz, Schnell -Polka, op.393*

その頃、宮廷舞踏会音楽監督の地位にあったヨハン2世は、1881年2月22日にゾフィーエンバートで同曲を作家・ジャーナリストによる「コンコルディア協会」で初演。7作目のオペレッタ《女王のレースのハンカチーフ》の第3幕と第1幕のフィナーレからメロディーが使われています。命名は指揮を担当した弟エドゥアルト。単調な生活にあるヨハン2世にも、「恋と踊りに夢中」だとするうわさが絶えないことを。